一夏会報（いちげ）

No.61

平成23年11月１日

発行：鶴見大学

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3

TEL.045-581-1001（代）

http://www.tsurumi-u.ac.jp

鶴見大学学長

木村　清孝

釈尊の「一夏」の集い

皆さん、二箇月にわたる司書・司書補講習の受講、お疲れ様でした。無事の修了を心よりお慶び申し上げます。

今年は、「節電の夏」で、皆さんにもさまざまにご不便をおかけし、また我慢をしていただいたのではないかと思います。お詫びを申し上げるとともに、ご協力に対して厚く御礼申し上げます。そして、この経験が、皆さんをより逞しく、かつ、美しくしてくれるであろうことを確信しております。

ところで、本誌は「一夏会報」と名づけられています。その「一夏」という言葉が、約二千五百年前、インドにおいて夏の雨期の期間（ほぼ三箇月）に釈尊とその弟子たちが集まって行った合同修行（これを「夏安居（げあんご）」と呼びます）に由来することについては、以前申し上げました。今回は、その「夏安居」の様子を垣間見させる一話の概略をご紹介して、ご一緒に、釈尊を中心とする「一夏の集い」に想いを馳せることにしましょう。

あるとき、釈尊は、コーサラ国の祇園精舎（ぎおんしょうじゃ）で夏安居に入っておられた。そのとき、「精舎を寄贈した施主の」スダッタ長者が釈尊のもとへやってきて、足に頭をつけて丁寧な挨拶をし、釈尊の説法を聞いた。

長者は、すっかり喜んで、また釈尊に礼をし、合掌して申し上げた。「どうか世尊よ、お弟子の皆さんとともに、私がささげる、三月の「夏安居の」間の衣と食事と病気の際の湯薬をお受けください」。すると釈尊（世尊）は、黙ってこれを承諾した。

三月が過ぎて、スダッタ長者はまた釈尊のもとへやってきた。そして、前と同じように丁寧に挨拶してから、退いて片隅に坐った。

釈尊は、スダッタ長者に告げられた。「すばらしいことだ、長者よ。あなたは三月の「夏安居の」間、供養を行い、衣と食事と病気の際の湯薬を私たちに提供された。あなたは、この行いによって天に生まれるだけの功徳（くどく）を積まれた。未来の世では、必ず安楽の報いを得られよう。しかし、あなたは今、黙ってこの報いを受けることを待ち望んでいてはならない。あなたは、精進して、常に「世間的な欲望から」離れることと、「正しい教えを」喜ぶことを学び、それをしっかりと体得するがよい」。これを聞いて、スダッタ長者は心から喜び、座を立って出ていった。（『雑阿含経（ざつあごんきょう）』一七）

いまここで、皆さんにとくに目を向けてほしいことは、次の二点です。

第一は、仏教教団の一夏の修行は、在俗信者の生活面での支援・協力なしには成立しなかったということです。私たちは、仏教教団を支える上で、在俗信者の役割がとても大きいことを忘れてはなりません。現代の民主社会に置き換えていえば、どのような形のものにせよ、専門的教育は、個人・企業・団体・国家等の支援と協力なしでは成り立たないということでしょうか。

第二は、長者に対する釈尊の説法が、出家者である比丘たちに対するものと同等であるということです。在俗の信者に対しても、その功徳によって約束される快適で楽しい生活を願うのではなく、「真実を求める」ことを勧められているわけです。このことは、本来、仏教がすべての人に開かれた平等な教えであることを証するとともに、在俗の生活が、心がけ次第で、出家の生活に並ぶ価値と内実を有していることを、釈尊が認めておられたことを示すものでしょう。

皆さんが、仏教の伝統に育まれた本学でこの意義深い講習を受講されたことを機縁として、「真実を求める」ことの大切さをもう一度じっくりと考えてくださることを願ってやみません。

講習生の皆様へ

鶴見大学司書・
司書補講習主任教授
岡田　靖

皆様がこの一夏会報をお読みになっている頃は、そろそろ冬の寒さが忍び寄ってきているかもしれません。私は今九月二十二日講習係の担当者から矢の催促を受けてやっと書き始めているところです。ようやく少し涼しさを感じることができるようになりました。しかし、皆様は今年の夏は特に暑く感じられたのではないでしょうか。震災の影響で節電を余儀なくされたことも大きな理由でしょう。皆様にとりましては、それにも増して講習を受けられたことで尚更暑さを感じられたのではないでしょうか。月曜から土曜まで、毎日九時から十六時十分まで、多い日は十七時五十分までの授業を受けられたということは、多分今まで経験なさったことのない厳しい環境の夏を過ごされたことと思います。

そのような厳しい暑さの中で頑張られた結果、資格を取得されたということは素晴らしいことです。しかし、閉講式の時にもお話いたしましたが、皆様は資格を得られたところで終了ではありません。やっと図書館の世界の入り口に立たれたわけです。

外から見ている限りでは、図書館の世界は動きが少なく、いかにものんびりしているように見えるようです。実際はまったく異なります。日々めまぐるしく変化しています。例えばコンピュータも図書館の世界ではかなり早い時代から取り入れられています。一九六〇年代後半にはすでにコンピュータ目録（MARC）がアメリカで作成されています。それ以来図書館の世界とコンピュータは切っても切れない縁となっております。日本でもコンピュータ目録は一九八〇年代には作成されています。またインターネット以前から、固定電話を利用したデータのやり取りが可能なシステムが構築されていました。それはモデムができる以前から、カプラー（受話器をそれにのせて音声でデータのやり取りができる装置：懐かしいなぁと感じられる方もいらっしゃるのでは）などという装置を使用して行われていました。このように図書館の世界ではいろいろな場面で、その時代の最先端技術を駆使してきました。現在でもそれは続いています。そのような環境に対応するためには日々の努力と勉強が必要とされます。皆様もこの世界の入り口に立たれたわけですので、その変化について行くべく日々の努力と勉強がこれからますます必要となります。講習が終了してホッとなさっている気持ちはよくわかります。実は私どもも毎年講習が終了しますと、ホッと一息という気持ちになります。しかし、ここでホッとしたままになりますと次の進歩がありません。一息入れた後には次のステップへの出発をしましょう。

次のステップへの出発などというと、何か大層なことのように思われるかもしれませんが決してそのようなことはありません。また、変化に対応するというと、どうしてもコンピュータ中心になるようなことを考えがちですが、そうではありません。確かにコンピュータを中心としたいろいろな動きに対応することも重要ではありますが、それだけではないのです。コンピュータ全盛の昨今でも、基本的に重要なことは人間と人間の関係です。図書館の世界はもとより、いろいろな分野の方々との交流を持つことが次への進歩につながります。その第一歩として、講習で培った人の輪を広げていくことが重要ではないでしょうか。ここで仲間になった方々との交流を深めることが次のステップへの出発点ではないでしょうか。僅か二ヶ月ではありますが、お互いに協力して厳しい夏を乗り切った仲間です。この絆は皆様にとっては大切な財産となります。この財産をうまく活用することこそ次のステップへの出発となるのではないかと思われます。

また、ここで教えていただいた先生方との交流を深めることによって、新しい知識や技術に触れることも可能になります。先生方も皆様への協力は惜しみません。是非先生方へのアプローチをしてください。そして、何か困ったことが生じましたら、皆様の図書館界への原点となった鶴見大学に戻って来てください。六十周年（平成二十六年）をむかえる、伝統ある本学の司書・司書補講習の仲間たちと協力して解決しようではありませんか。そうすることによって、ますます人の輪が広がっていき、未来への道も開けることが期待できます。どうかこの夏に培われた仲間たちとの絆を大切にしてください。

コミュニケーション論

鶴見大学
教授
吉村　順子

司書に関する履修科目の更新に伴い、私の担当科目は今年度で終了の予定です。10年間にわたって夏の終わりに実施してきた講義は、私にとっても毎年楽しみな仕事でした。これが終わると秋風が立つという季節の移ろいを感じる仕事でもありました。

ここ数年、実際に図書館の現場で働いている受講生の割合が多くなったように思います。そのせいか現場で起こっている出来事への対処の仕方についての質問が増えました。質問に質問で答えるというのは苦笑ものかもしれませんが、他の受講生の方にも意見を聞いてみると、熱心な発案があったり、実践の披露があったりして、講師自身も興味深く問題について考える機会がたびたびありました。来館者の多様なニーズやトラブルに、どう対処するか、どの図書館カウンターでも、頭を悩ましておられるようです。

講義はコミュニケーションの基本を人間の発達の仕組みから説き起こします。そのあと、社会的な状況において個人が被る影響について述べるというコースが標準でした。さらに、心理空間の距離の問題、アサーション（自己主張）のあり方、リラクセーションの方法、自己開示の実習、傾聴のあり方など実践的なテーマを織り込んで行いました。

リラクセーションの実習は、呼吸法を用いて、簡単にだれでもどこでもできるやり方をその場で実習します。自分のペースで声に出さずにゆっくり10数えます。数える間息をできるだけゆっくり吐きます。全員が落ち着いていき、講義室が豊かな静かさに包まれていきます。最後には目をあけて、そのまましばらくだれも口をきかず、みじろぎもせず、期せずして全員が沈黙の時間を味わうことになります。その時間は、図書館がもつ、静かだけれど豊かに活動している空間が現出している気がしました。図書館のサービスは常に他者からの多様な要望を受けとめることです。相手がいらいらしていたり、妙にテンションが高くて声が大きかったりということがあるでしょう。でも、静かに、とか声を低くと注意を与えることが、場の空気をとげとげしたものにかえてしまったり、逆ギレというような状況を生んだりしがちです。それならば、カウンターにいるスタッフ自身がリラックスして、落ち着いた静かな空気を常にイメージしていることによって、その前に立つ来館者自身もまた、静かに落ち着いた状態になっていくはずです。

突飛な提案ですが、せっかく鶴見大学において司書講習を受けている皆さんなのですから、総持寺において、数時間の参禅研修のオプションというのはどうでしょう。一見、参禅と司書講習は関連がありませんが、静かに内面に向かう態度を経験することが、落ち着いた司書の態度を涵養することにつながるのではないかと思います。

ネットでいくらでも情報を得ることができるようになった昨今、図書館の機能は、情報を保持して来館者に提供するという基本機能だけでなくなっています。その分、来館者の要望も多様になり、しばしば想定していないようなやりとりが起こっているようです。すべて、人間関係において、対処の仕方によって、快刀乱麻を断つごとくに解決する方法はないと言っていいでしょう。でも、相手の話を否定しないで良く聴き、こちらの中に落ち着きとリラックスした心持ちがあれば、それほど困った事態にはならないでしょう。コミュニケーション論はなくなりますが、どうぞ、司書講習にいらっしゃるみなさん、ご自分の心の中の静けさに気付き、そこに戻る方法としてのご自分にあったリラクセーション法をみつけてください。お元気で。

一夏会報を手にしている皆さん

東海大学
講師
吉田　隆

『一夏会報』を手にしている皆さん、いかがお過ごしですか。バカンスを返上して「司書・司書補講習」を受講した皆さんは、今頃は過ぎ去った猛暑の夏を振り返り、二か月にわたる講習にどのような〈意味〉、どのような〈色彩〉を与えているでしょうか。司書・司書補資格取得をめぐり悲喜こもごもかもしれません。ギリシャの哲学者アリストテレスの名言「学問に王道はない」を想起するならば『図書館学』にも〈王道〉はないといえます。王道がないのですから誰にも道が開かれています。努力をすることを怠ることがなければ、誰にでも司書・司書補資格取得への道は〈公平〉に開かれています。

私が図書館に職を得たのは１９８３年、鶴見大学での資格取得は１９８９年でした。授業でもお話したのですが、勤務先の出張「司書主務者の研修会」修了後の懇親会で「資格取得はどこで？」と参加者の一人から問われたことがありました。その時はまだ未取得でしたから、回答できなく、なんとなく心さみしくなったことを覚えています。「資格取得は必要なのかな？」と思ったのは、後にも先にもその時だけでした。図書館利用者サービスからみますと、利用者にとっては、行きつけの図書館で好いホスピタリティ（おもてなし）を受けられ、設問に即事的な回答をしてもらえれば、それが好い図書館・図書館員であります。私たちの有資格・無資格、専任・非専任は今風にいうと「そんなこと関係ない」ということになるのかも知れません。

私は、他大学で「文献情報検索法１」（法令により専門資料論と資料特論に相当）という社会教育主事資格課程と司書資格課程の選択必修科目を担当しています。春期の授業で複数の履修者から「これまで司書課程を履修して来て図書館員としてのスキルが身についているのか不安を感じることが多かった」が、しかし、演習科目を履修したことで、「司書の勉強をしているんだという実感が初めて湧いた」という意見がありました。演習科目に取組む時には、岡田先生の『資料の整理』ほか諸先生から学んだ知識（理論）を総合し、実務に活かすことが求められます。「司書の勉強をしているんだという実感が初めて湧いた」ことでスキルについて「不安」がなくなった点については、私も「そうだろうな」と思いました。

図書館員のスキルについては、①Subject（主題）の知識②ベンダーの知識（図書館員がビジネス感覚を持つこと）③データベースの知識④コンピューター・ハードウェアとソフトウェアを価値判断し評価する能力⑤コンピューターおよび情報概念の理解とシステム分析⑥図書館資料のデジタル化プロジェクトの立案の実行と管理運営する能力⑦国内外の図書館の新しいテクノロジーおよび新サービスを自館に活かす〈経営〉能力（目的合理的な行為）が必須です。そして何よりも大切な周りとうまくやれるかといった〈コミュニケーション力〉とSocial Skill（社会性）が図書館の〈経営〉に従事する図書館員に要求されています。しかし今現在の皆さんの職域の現状は、必ずしもこの求められた要求にそぐわないことが多々認められるかもしれません。にもかかわらず、〈利用者サービス〉を私たちの仕事の大前提にするならば、これらの要求に応えられるように日々自己研鑽に努めなければなりません。私たちは日々の仕事に従事することでしか自己を表現することができません。皆さんも鶴見大学で学んだ図書館学の諸科目を図書館・図書館類縁機関の各職域で活かせるよう可能な限り早めに職業選択を試みてください。そして日々の仕事で場数を重ね、キャリアパスを積み重ねる努力をしてみてください。専任の道もあれば、非専任の道もあります。ひょっとしたら〈僥倖〉が皆さんに訪れ専任への道が開かれる時があります。せっかく得た知識には間を置かないことです。自分が生活の糧を得るために司書・司書補を必要とする職域を選択するのか、自らの〈天職〉として選択したのかは、皆さんの思い入れは各々異なるでしょう。しかし、何はともあれ、まず私たちは司書・司書補の仕事に従事しなければなりません。この仕事に従事してこそ、〈公平〉に労苦があり、喜びがあります。それ故に、自分の生き方に〈意味〉を、〈色彩〉を与えることができるのです。

受講生
司書

感謝の一夏

佐藤　伸

この春、長年勤めた民間会社を早期退職するにあたり、セカンドライフは、身近な図書館で本とともに人と関わり、今まで培った経験が活かせればという気持ちが湧き上がりました。身近な図書館であればこそ色々な役割を担うことができるという想いはあっても図書館に関する知識はないことから、鶴見大学の司書講習に参加させていただきました。

講義は博学で個性とユーモアに溢れる先生方の熱心な指導で熱く引き込まれるものでした。また、講義を通して、図書館は大きな変革の真っ只中にあり地域サービスとして何をどのように提供していくか、その為に、今、何をすべきかというメッセージを沢山いただいたような気がします。そのメッセージを受け、私は、今まで培った経験は必ず活かせると確信し心強く感じることができました。

しかし、2、3日置きに迎える新たな科目と修了試験やレポートは息つく暇もないようなめまぐるしい日々の繰り返しで久しく遠のいていた身には苦戦の連続でした。

そんな中、私にとっては半世紀ぶりとなる絵本の読み聞かせやストーリーテリング、照れながらの手遊びは心安らぐ時間を与えていただきました。また、最終科目のレファレンスサービス演習は模擬採点結果を受け、異様な熱気と連帯感に包まれ、一気に盛り上がりを見せた講義となりました。閉館まで館内で読み漁り、帰宅後に徹夜でまとめという声があちこちから聞こえ、互いに助け合いながら最高潮のテンションで迎えた最終日、興奮覚めやらないなかでの懇親会となりました。

講習を終えた今、このような熱い充実した機会を与えていただいた鶴見大学に感謝でいっぱいです。

最後に、熱意をもって一夏導いていただいた先生方、事務局、毎朝ご挨拶いただいた警備、清掃の方々この場を借りて御礼申し上げます。そして、めまぐるしく充実した一夏をともに学び助け合った受講仲間の方々本当にありがとうございました。

ともに、鶴見での感謝を忘れず、真のライブラリアンとなるべく邁進しましょう。

受講生
司書

二年間の熱い夏

近藤　千歌

昨年の夏は、三十年に一度の異常気象とまで言われた、猛暑でした。私は、その暑い夏、司書補の資格を取得するため、鶴見大学に通うことを決めました。以前は、保育の仕事をし、日々、子ども達と音楽、読書、運動、さまざまな遊びを通し、毎日元気に過ごしてきました。時に、障害のある子、就学困難な子、気になる子、虐待を受けていた子の担任もしてきましたが、いずれも、他機関との連携を密にし、全力で対応し、結果、問題を解決することが出来ました。しかし私は、二年前、体調を崩しました。理由は、資格を持たない上司の心無い言葉や、態度によるものでした。そんな私が、元気を取り戻すことが出来たのは、図書館のおかげです。図書館は、私に、くつろぎの時間や、交流の場、問題解決の場を提供してくれました。再び歩き出す勇気をくれた図書館について、学びたく、しかし、いきなり司書資格取得には不安があり、リハビリも兼ねて、司書補講習に臨むことにしました。素晴らしい先生方や、友人達に出会い、多くの学びを得た経験は、一生忘れることの出来ない私の財産となりました。

そして、この夏、いよいよ本番。司書講習は、日程も、司書補講習より長期に及びハードなため、体調管理も重要で、たとえ、受講資格を得ても、最後まで、やり遂げることの出来る、強い精神力や忍耐力も合わせて必要となり、春から、ランニングや、ウォーキングを始め、毎日欠かさず行い、折れない心作りに励んできました。そのため、受講資格を手にした時の喜びは、ひとしおでした。

今年の夏も、暑い夏でした。短期決戦の、私たち受講生が、分かり易く身に付き、不安なく試験に臨むことが出来るよう、工夫した授業作りをしてくださった先生方ありがとうございました。常に一人一人に、寄り添い丁寧に、そして熱心にご指導頂きましたこと、忘れません。現場に出る機会を持ちましたら、この姿勢を忘れず実践したいと思います。励まし合い支え合った友人達、応援してくれた家族、ありがとう。

受講生
司書補

熱い夏を過ごして

成川　裕子

今年は、3月11日に東日本大震災があり、特別な夏でした。誰もが、自分に何ができるのだろうかと考えている年ではないでしょうか。

私は、ボランティアとして長く子どもと本に関わり、子どもたちが、真直ぐに、絵本や昔話、物語と向き合い、楽しんでくれることを体験してきました。本の力を信じ、今よりもっと子どもたちと深く関わり、本を手渡すことを仕事としたい、ひいては学校図書館で働きたいと考え、司書補講習に応募しました。

個性溢れる先生方の授業は、毎日、毎時間が真剣勝負でした。図書館の一利用者に過ぎなかった私は、最初は初めて聞く言葉、仕組みに目をシロクロさせていました。その時分かったつもりになっていても実は理解していなかったということも多く、自分の力不足に落ち込むこともしばしばでした。仲間に教えて貰って、やっと時間内にレポートを提出できたということもありました。日を重ね、どんどん進んでいくうちに、少しずつ体系的に理解できるようになれたような気がします。限られた短い時間に、力を込めて教えて下さる先生方と、真剣そのもので必死に付いていく我々受講生。仲間に引っ張って貰って、自分も頑張れる楽しく濃密な時間でした。学ぶことは本当に楽しいのだと実感する毎日でした。

そんな熱い夏を過ごした私の本箱に、ひとつ大切なコーナーができました。それは、先生方の講義資料とテキストと自分のノート、勧めていただいた関連の書籍のコーナーです。これから、ゆっくり時間を掛けて振り返り、復習し自分の中に蓄積させていかなければならないと思っています。ひとりでやるのはとても大変ですが…。自分にできることを精一杯やって社会に関わる、それも大変な社会の復興支援にどこかで繋がるのではないかと思っています。

熱い講義をして下さった先生方、お世話をして下さった職員の方々、毎朝元気を下さった警備の方々、施設をピカピカにして気持ちよく使わせて下さった方々、本当にお世話になりました。励まし合えた受講仲間の皆様に出会えたことも、しあわせなことでした。心からありがとうございました。

受講生
司書補

あっという間の2ヶ月

伊藤　寛子

講習の終了を前に、こんな風に終了後の文章を書くだなんて思ってもみませんでした。

内心無事に資格を取れるのか、とても不安です。来年もお世話になるやもしれません…。

それに私、文才ないのですが、よいのでしょうか？この文章が皆さんの記憶に残らないことを心から祈ります。

この講習が、始まる前ちゃんと通いきれるのか？ついていけるのか？不安で仕方ありませんでした。しかし始まってみると、とにかくあっという間。そんなこと考えるまもなく、授業、レポートに追われる日々。そして同じく講習に通う皆さんの積極的に取り組む姿に、私もこれではいけない！と改めて気が引き締まったのを覚えています。

もちろん個性豊かな先生方のお話もおもしろく、図書館での勤務経験のない私には毎日が新しい知識との出会いでした。先生方の体験談や図書館のことなどいろいろな話を聞き図書館で働くことの大変さも知りましたが、同時に更に興味もわいてきました。

そして、この講習を通して、貴重な体験もできました。直接古典籍に触れたり、一日がかりでのレファレンス演習、インターネットを通しての情報検索、絵本の読み聞かせの仕方や実際に読み聞かせを聞いたりと普段は、できないことばかり。どれも印象深く、大変なこともたくさんありましたが、その分印象にも残っています。

これからが新たなスタートとなり、まだまだ学ぶこともたくさんあると思いますが、これらの経験を活かし図書館や本により深く関わっていけたらと思います。

今年は節電もあり、暑いうえに、朝も早く大変でしたが、講習に参加することで、今年の夏は充実したものになりました。

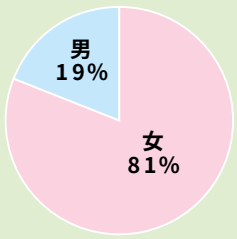
最後に、先生方、職員の皆さま、警備や清掃の皆さま。ありがとうございました。何より同じクラスの皆さま。ありがとうございました！そしてお疲れ様でした！

アンケート

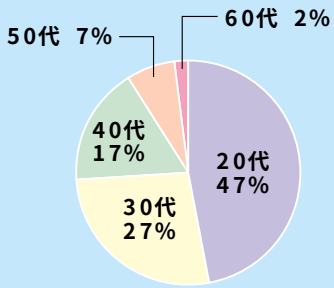
◆平成２３年度司書講習アンケート集計結果◆

（回答数／受講数＝148名／167名）

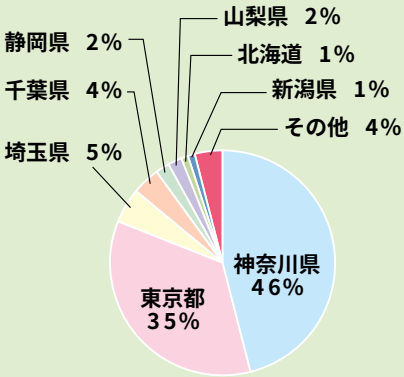
男女別データ



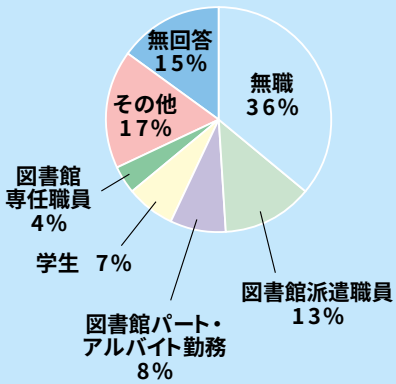
年齢別データ



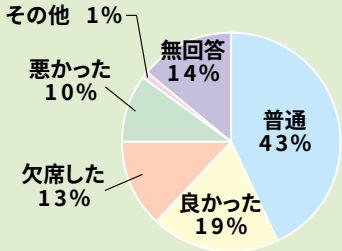
出身県別データ



職業別データ



特別講演会について



●主な理由

普通・・・時間が足りず、後半が駆け足になってしまい残念だった。

良かった・・・ハワイの図書館の歴史について知ることができて、大変興味深かった。

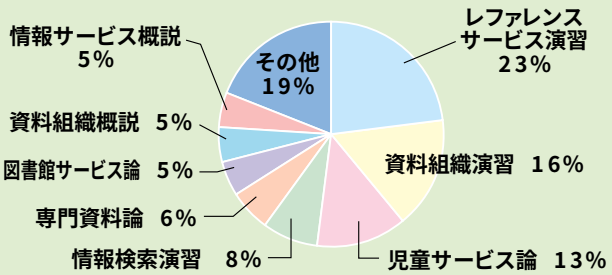
悪かった・・・一番聴きたかったデジタルライブラリーについて聴くことができなかった。

感　想

●主なもの

- 大変な2ヶ月間でしたが、受講生同士が声かけや協力し合うことができ、おかげで最後まで通うことができました。
- 同じ目標を持つ仲間ができ、これからの友としても出会えた事は良かった。
- 図書館・OA研修室のネットの接続が悪く、演習時に大変苦労した。
- PC初心者講習は、自己流の悪い点も確認ができてよかった。
- 学ぶ機会は貴重だと思うので、有資格者向けの講習があれば受講してみたい。
- 大変でしたが有意義な2ヶ月間でした。本当にありがとうございました。

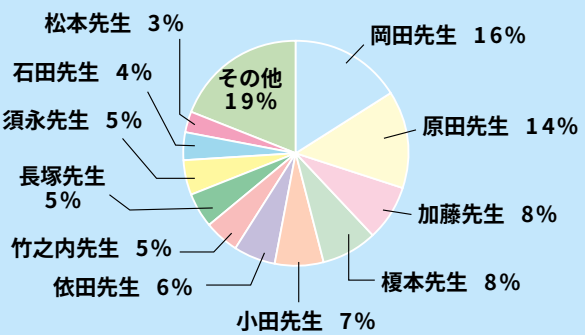
印象に残った科目（複数回答）



●主な理由

- レファレンスサービス演習…今までの総括という感じがして、とても大変でしたが「力」になりました。
- 児童サービス論…読み聞かせの体験や絵本の紹介など、実践的で楽しい授業だった。
- 資料組織演習…難解な印象があったが、解り易い授業と丁寧な指導で、とても楽しかった。
- 情報検索演習…課題が多くて苦労したが、その分ためになったと感じた。

印象に残った講師（複数回答）



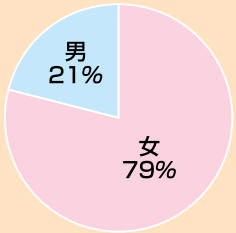
●主な理由

- 岡田先生…温かいお人柄と面白いお話で、楽しく受講できました。
- 原田先生…厳しくもあったが、丁寧な授業で分かり易かった。
- 加藤先生…世界的視野で講義いただき、とても興味深かった。
- 榎本先生…とても整理された解り易い授業だった。
- 小田先生…知識の豊富さと、工夫された授業進行で楽しく学べた。

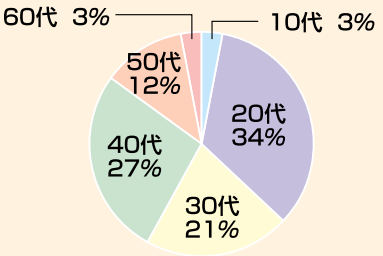
アンケート

◆平成23年度司書補講習アンケート集計結果◆ （回答数／受講数＝28名／33名）

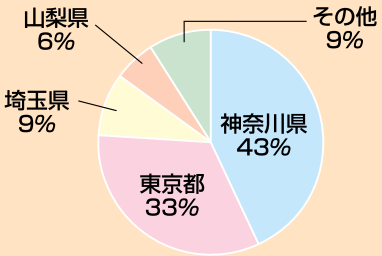
男女別データ



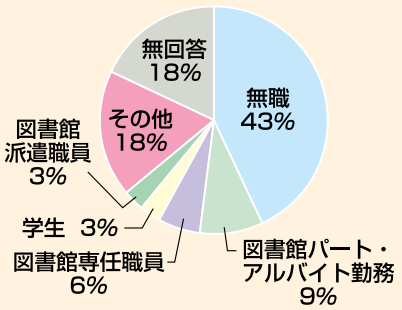
年齢別データ



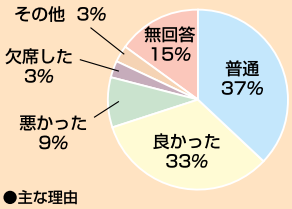
出身県別データ



職業別データ



特別講演会について



●主な理由

普通・・・時間配分が悪かったのか、一番大事なところが抜けてしまって残念だった。

良かった・・・とても素敵な講師の方で、もう少しお話が聴きたかった。

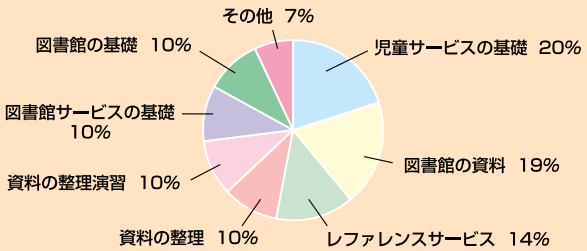
悪かった・・・内容が分かりにくかった。

感　想

●主なもの

- 広くて大学図書館ならではの閲覧スペースに感動した。レファレンスブックが充実しているところも、魅力的だった。
- OA研修室のPCがフリーズしてしまうことが多く、授業について行けず焦った。
- PC初心者講習は、初めの一歩からていねいに教えていただきよかった。
- 日々進歩する図書館業界の情報を知る為なら、有料でも上級講座への受講を考えたい。
- 司書補クラスは人数も少なくアットホームな雰囲気でよかった。ここで知り合った仲間とは末永く付き合えるとよい。
- 2ヶ月間休まず通うことができてよかった。この資格を次に活かしていきたいと思う。

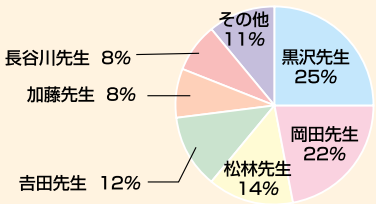
印象に残った科目（複数回答）



●主な理由

- 児童サービスの基礎…以前から興味があったので、現職の講師に学べて良かった。
- 図書館の資料…実際に古典籍に触れての学習は、とても面白かった。
- レファレンスサービス…レファレンスの基礎は時間が許せばもっと学びたいと思った。
- 資料の整理…授業にメリハリがあって理解しやすかった。

印象に残った講師（複数回答）



●主な理由

- 黒沢先生…実際の図書館での出来事をいっぱい話して頂き、とても楽しく感じました。
- 岡田先生…人柄が温かく、先生と一緒に飲みに行きたくなった。
- 松林先生…一所懸命に教えて下さろうとしている姿、カッコ良かったです。
- 吉田先生…個性的な先生で、授業が聴きやすく楽しかった。
- 加藤先生…図書館への深い思いを感じ、もっとたくさんお話を伺いたかった
- 長谷川先生…内容が素晴らしく、また楽しく教授していただいた。

■司書・司書補講習の歩み■

鶴見大学の司書・司書補講習は、昭和29年（1954）の開講以来、今年で58年目を迎えました。この間、優秀な修了者を多数輩出し、多くの先生方によるご指導を受け、本学の講習は成長してまいりました。そして昭和38年には「一夏会」が発足し、この会報の由来ともなっております。また、平成9年には大学会館での講習がスタートし、JR鶴見駅から徒歩1分という恵まれた環境で講習を行うことができるようになりました。

施設面では、約60台のパソコンからなるOA研修室、78万冊にも及ぶ質の高い蔵書群を所蔵しコンピュータを駆使した高度な情報提供機能を持っている図書館の使用など、時代のニーズにふさわしい講習を行っております。

本学司書・司書補講習は、これらの歴史と数多くの優秀な修了者を誇りにこれからも発展を続けていきます。

【司書・司書補講習受講生の皆様へ】

アンケートにご協力頂きましてありがとうございました。このアンケート結果を参考に今後もより良い講習にしていきたいと思います。また、この一夏会報を刊行するにあたり、原稿をご執筆いただきました先生方・受講生の方々に深く感謝申し上げます。

真夏の暑い中、2ヶ月間お疲れ様でした。